しめる力をもつと思はれる。其等個々の問題についての論義は、著者の如き立場に立ち、著者の如き勞苦を重ねて後可能であらう。たゞ一般的紹介に終る所以である。

たゞ讀後の印象の一を附加したきは、何人も氣附く如く著者の執れる立場の限界についてである。政治史的以下の三史觀を擧げて之と對示するかの如く津田氏の方法を示してゐるが、この言辭を素樸に解釋するとき津田氏の態度を前三者と相容れ得ぬとする見解であるかに見える。捉はれた史觀を斥けることは云ふ迄もない、また歴史研究の正しきにおいて基礎的研究の缺くべからざるは自明の事柄である。問題はその上に立つ歴史理解の態度についてゞあり、著者が、社會事象の考察にあたり同時に關聯する他のものを取扱ふは勿論であるとするとき、また序において史家の立場の堅持といふとき、その方法についての說をも序において望ましいと思ふのである。(菊版本文六〇六頁、索引二六頁、昭和十三年六月、至文堂發行、定價五圓)〔藤直幹〕

## 國分寺の研究

角田文衞編

國分寺に關する論攷として從來公けにせられたものは其の數極めて多數に登るが、通じての傾向は文獻又は遺蹟の一方的なる探求に偏し、殊に遺蹟を主とするものにあつては各個の國分寺の個別的記述に終始して、汎く國分寺全般の立場からこれを考察するところは極めて尠かつた。文獻的研究に於いてはその缺陷を生じてはゐないが、又一面に於いて單にその沿革の究明に主力を注ぎ組織、機能等の構造的な部門は殆んど顧みられなかつた。これは專ら遺蹟の全國散在、史料蒐集の煩雜に基くのであるが、今般京都帝大考古學研究室の角田文衞氏の編纂に依り、文獻遺蹟の國分寺の綜合的研究が企てられ、六十有餘氏の執筆に依つて尨然二册の大著が公けにせられ、學界の久しきに亘る渴望が充たされたのは誠に慶賀に堪へない。

さて本書の體制は四編に分れてゐる。第一編は國分寺概觀と題し、設置、組織、襄類の問題が、東大寺の草創、國府・國分寺關係の神社、國分寺の塔に關する論攷と共に取扱はれ、第二編は東大寺及び法華寺の研究として、東大寺の規模、その寺領、正倉院、三月堂、及び法華寺の沿革が建築史、經濟史、文學史、美術史等の立場からそれ〴〵檢討されてゐる。第三編は國分寺各說であつて畿內七道の順に各國分寺の現狀報告が揭げられ、第四編は餘論として奈良時代の建築・古瓦・隋唐の官寺を中心とする佛教政策に關する論文及び國分寺研究史が收められてある。更に最後に薩摩國分寺文書と獨文の概要が附載せられてゐる。圖版は極めて鮮明且潤澤に用ひられ、遺蹟の實際を手に取るごとくならしめ、又多數の挿入カットは記述の理解を容易ならしめてゐる。以つて編者の意圖が奈邊に存したかを如實に知ることができる。

八十幾編に上る論文は、その主とするところに從つて遺蹟又は文獻の徵證を多數且精緻に揭載してその論の由つて來るところを

明らかにしてゐてそれ〴〵に高く評價せらるべきものであるが、しかもそのうちにあつても角田文衞氏の執筆に成る國分寺の寺院組織の一編は、全國の遺蹟に關する知見並びに豐富なる文獻史料蒐集に依つて國分寺の規模及び機能を伽藍・宗旨・佛像・僧尼・法會・經濟の六項に分けて究明した點に於いて特に推賞せらるべきものであらう。併し乍ら文獻遺蹟の兩者を據證とする歷史考古學の立場はその兩者の示證力が本來性質を異にすることに依つて、困難なるものをそのうちに持つてゐるのを見逃し得ない。國分寺に關する問題のうちでも至難なものは設置の詔勅の解釋であるが、角田文衞氏は室町時代の文書に國分寺を記して「こくぶ寺」とすることを始めとして、天平十三年以前に各國衙の附近に寺院が存し、詔勅に依る法會が國廳に於いてではなく寺院に於いて勤修せられたことを指摘して、國分寺以前に國府寺なる寺院が各國衙に附屬してゐたことを主張し、それを裏付けるものとして現在の遺蹟のあるものよりは天平以前と認めらるゝ古瓦の出土する事實をあげてゐる。この主張は極めて示唆多きものであるが、しかも猶現在の文獻的史料に於いては確證を見出し得ず古瓦のみを以つてしては確然たることを云ひ得ないものとせねばならぬ。この困難のために氏の立論は稍論旨の徹底を缺いてゐるが、將來この問題を解決するものは遺蹟の徹底的調査以外に恐らくはないものと思はれる。その意味に於いてこの書の編纂は國分寺研究の將來に向つて新たなる問題を提供したものと云ふべきものであらう。（考古學研究會發行、本文一、七五九頁、獨文一一頁原色版一頁、圖版コロタイプ百頁、挿圖五一〇頁、上下二册、價格四拾圓）〔赤松俊秀〕

## 石門心學史の研究

石川　謙著

享保の昔市井の一商人學者石田梅岩によつて創められた所謂石門心學の教へが、その平易にして捕はれるところなき教理と、その門弟等の熱心にして組織ある布教方法とによつて、幕末に至るまで二百年の間廣く全國に流布し社會のあらゆる階級に信奉せられて、よく國民道德の向上、社會風教の維持に貢獻するところあつた事は、日本思想史或は教育史の上に於ける最も著しい事象として夙に人々の注意するところであり、古く足立栗園氏の「心學史要」をはじめ、白石正邦氏の「石門心學の研究」等既にいくつかの論著が公にされてゐる。併しながらそれらの研究は多くは唯心學者の一々の著述に見はれた思想を當時の一般思想所謂神儒佛いづれかの一分派として簡單に理解するか、或は社會の階級的構造に卽してその觀念形態の特性を一般的に說明するかであつて、未だ眞にその本質を明らかにしその歷史的意味をつくすものとはなし難く、況してその教化の方法とその普及に關しては殆ど唯靈舍の組織やその分布、道話の盛況等を記述するにとゞまつて、それが具體的に教理の發展と如何に關係し、且つ如何なる順序を以て實現せられたか等の點に就ては何等說明するところがなかつた。これは一つは普及そのことの結果としてそれに關する直接的資料が